

税理士のひとりごと

税理士の佐藤です。現在、大リーグではワールドシリーズ、日本では日本シリーズなど野球の話題で茶の間は大変盛り上がっています。

一方、すでにシーズンが終わったチームの監督や選手はその去就に戦々恐々です。わが北海道に関しては日ハム新庄監督の続投表明に喜びが広がっていますが、今日現在、数名の監督のクビ(?)が確定しています。

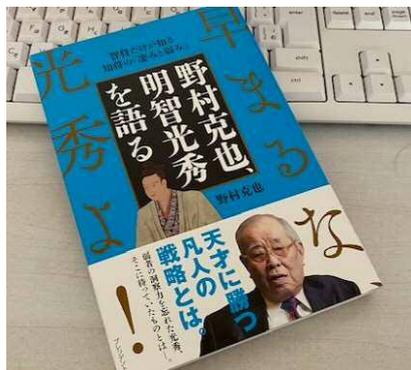


最下位からパリーグ三連覇を成し遂げたオリックス・中嶋監督、わずか一年しかチャンスを与えられなかった楽天・今江監督、元スター選手としてチームをまかされた中日・立浪監督と埼玉西武ライオンズ・松井稼頭央監督、渡辺監督。ほかにも名将阪神・岡田監督が退任しています。

プロ野球界は成績(業績)が悪いと簡単にトップ(監督)のクビがとぶ恐ろしい世界です。とはいえ、中小企業のトップ(経営者)は業績が悪くても安易に従業員を解雇する事は出来ず、すべての責任を背負わなければならないもっと厳しい世界です。。。

名将から学ぶ

日本のプロ野球史上多くの名将(監督)が現れチーム(組織)を強く育てあげました。その中でも野村克也監督(南海ホークス、ヤクルト、阪神、楽天)は名監督であるとの意見に異論を持つ人はいないでしょう。野村再生工場(Wikipediaにも記載)と言われるほど、伸び悩んでいる選手を生まれ変わらせ活躍させました。



を共有しましょう。

そこで、今月はトップとしての先輩である野村克也氏の著書(「野村克也、明智光秀を語る」、プレジデント社)をテキストに戦略

戦国時代と野球

野村氏の視点で「明智光秀」を語って欲しいとの編集部長の依頼により本書を執筆する事になったと冒頭述べています。

「確かに、勝負の世界は、勝者になる人間にしる、敗者になる人間にしる、その一瞬に全エネルギーを注ぎ込み、結果を競う世界である」と野球と戦(いくさ)の共通点を野村氏は語ります。

皆さんもご存じの通り、「明智光秀」は天才と呼ばれた「織田信長」の家臣とし、優れた軍事戦略家、卓越した手腕、文化人としての教養を備えていた人物のようです。



しかし、野村氏は「早まるな、光秀よ！」と本書の最後で語り、「本能寺の変」での戦術ミスを指摘します。一方、野村氏は光秀との

共通点については「想像して、実践して、反省する」。反省をしっかりとすることで、成功が確実に見えてくるとの考えが近いだろうと言います。

想像通り？

しかし、計画(思い)通りに行かないのが現実、野村氏は、策を練り(想像)し、その試合(実践)後に一球一球の配球と結果を思い出して反省するのが習慣でした。

武将も一緒に彼らは家臣が集まった場で戦のシミュレーションや反省会を行っていたはずだと野村氏は語ります。戦(いくさ)は再



戦不可能な命をかけた真剣勝負です。一度の失敗で命を失った武将や家臣、兵隊は無数に存在します。

だからこそ、頂点まで勝ち残った織田信長と明智光秀は優秀な戦略家であり戦術家なのは間違いないでしょう。

疑心暗鬼

野村氏はトップ(監督、経営者)の何によって組織(チーム、会社)が変わるかとの質問に「説得力」だろうと答えました。そして、その説得力が「信」につながる。リーダーに信用、信頼があると、同じことを言われてもその受けとめ方が全然違う。そこそこ戦力になる選手が揃っていれば「信」のある監督が就任すると、すぐ強豪チームになると自分の経験を語ります。

一方、織田信長は宿敵、武田家の滅亡を祝った宴で光秀が語った「上様、我らも年来骨を折り、ご奉公した甲斐がござった」との言葉に信長は「光秀、いつどこで骨を折ったと申すのじゃ」と激怒し、叱責します。

この時、光秀の心に疑心暗鬼が生じ、信長への「信」が失われました。主君である信長の考えと家臣として忠節を尽くした己の立場の違いが露になったのです。また、その後の信長からの冷遇が歴史を変える出来事に繋がったのかも知れません。



裏切りの代償

本能寺で信長を亡き者にした光秀は結局、天下を取ることができませんでした。「光秀ほどの知性のある人間がなぜ、とても残念だ。謀反人は天下人にはなれぬことは知っていたはずだ」と野村氏は光秀の才能を惜しみません。一方、信長亡き後に光秀より人望を集め、組織をまとめ上げた豊臣秀吉の器の大きさを野村氏は指摘します。

結局、光秀はトップ(監督)になる器ではなく、家臣(幹部・コーチなど)が適任だったのでしょうか。そう考えると、会社でもトップ(社長)と幹部の役割が大切な事が分かります。野村氏に見習って幹部や社員をしっかりと育てるためにも、私たちも経験に基づいた「説得力」を積み重ねた誠意と「信」のある人間になりたいものですね・・・。

一步一步、着実に積み重ねていけば、

予想以上の結果が得られるだろう

(豊臣秀吉)

編集後記：

日ハム同様、最下位の翌年に優勝やその手前まで急成長する事がプロ野球ではたまにあります。やはり、トップの器が大切なのでしょう。私たちも日々「器」を磨く努力が必要ですね・・・(寿)。